

「もとはこちら」のお話し

No.73

今月のテーマ

なりきる



迷ったら 迷いきるのが菩薩なり

悟る時は

悟りきったら菩薩なり

(平井謙次語録より)

北原ゆり筆

平井先生との日常的な雑談の中で、「これは面白いお話しだ」と思った時は、私はそれをメモ書きなどにして書きとめておりました。その中から幾つかのお話しを文章化し、先生に見ていただいたうえで手元に残しておりましたものが幾つか手元にございます。今月はその中から、「なりきる」というお話しをご紹介させて頂きたいと思います。

さて平井先生がのこされた色紙の中に、「もとはこちら 極めきつたら菩薩なり」というのがございますが、この「極めきる」という事も、「なりきる」ということに通じています。

しかし、言葉でひと口に「なりきる」というのは簡単ですが、実際に人間がひとつのものに、あるいはひとつの状態になりきるという事は、そうそう簡単にできる事ではありません。

なりきるということは、自我を離れるという事であり、同時にそれは己本来の姿に戻るといふ事でもあります。

ですから人間は菩薩の様になれる事はあつたとしても、菩薩そのものになる事はできません。

精神統一の状態とか、心身統一、あるいは無念無想の空の状態などといわれる状態もそれに近いと思いますが、もしも私達がそういう状態になりきる事ができれば、それは人間でありながら人間を越えた状態になれるという事です。

我があつて、我がない、忘我一体の状態です。

その様な状態になる為には、一般的には厳しい修行や類まれなる強い精神力が求められると考えがちですが、平井先生は、そういう特別な修行を積んだ特殊な人だけではなく、私達凡俗にもそういう世界を垣間見る事ができると言われるのです。

夫々の立場の違いを越え、対立を超え、夫々が自分とは全く異質の相手を完全に受け入れきった時、そこには今までは全く見えていなかった新しく、そして素晴らしい世界が、燦然と開けてくるというのです。

それでは先生のお話しをお聞きください、



~~~~~なりきる~~~~~

## ある日曜日

平井謙次談

久し振りの日曜日、家内が終日市街へ出向き、私は一人でのんびりと過ごしていました。

そこで、なにか面白い番組でもないかと思って、テレビのスイッチを入れたところ、丁度アルゼンチンタンゴのダンスをやっておりました。

元々私は、フィギアスケートとかテニス、サッカー、野球等というスポーツ放送が大好きです。

それは自分が幼少の頃より体が弱く、体育を禁止されていたからです。

心の世界では沢山動きたいと思い、しかし水泳も体操も鉄棒も出来なかった残念を、スポーツを観るというそのようなところに置き換えたということです。

それでスポーツ放送は、ニュース番組と同じくらいによく観ており、「観るスポーツ放送、万能」という生活を今

もしているわけです。

テレビでは、いわゆるスポーツというわけではありませんが、アルゼンチンタンゴのリズムに乗って、向こうのアルゼンチンタンゴの名手が踊っています。

私はどちらかといえば、女子シングルとか、男子シングルなどの、いわゆるシングルものが好きでしたが、いま目の前で繰り広げられているダンスは全部ペアで、入れかわり立ちかわり、実に鮮やかなダンスが繰り広げられています。私は思わずその息の合ったペアのダンスに見入ってしまいました。

シングルはシングルとして勿論よいのですが、これらペアを組んでいる男女の二人は、夫々別々の人格でありながら別々の人格ではなく、完全に二人がひとつになりきっています。

男性には男性としての逞しさとあり、女性には女性としてのしなやかさや優美さがあり、しかしそれら二人がひとつになりきっている姿を観て、私は改めてペアのダンスの奥深さというものに圧倒され、うーん、と唸ってしまいました。

時の経つのも忘れ画面に釘付けになっておりましたが、ふと気が付いて、十五分か二十分くらいも経ったかと時計をみたところ、何と見始めてから既に一時間も経っていました。

## 相乗の理

ところで昔、当時ロサンゼルスに在住しておられたヨガの行者、飯島貫実先生に、相乗の理ということをお教わった事がありました。<sup>かんじつ</sup>

ある仕事をするのに、二人が完全に一体になり、力を合わせきつた場合は、一人でそれを行なう時の六十四倍もの結果を出せるという話でした。

陰陽の力の成果です。このダンスでいえば、男性が陽で、女性は陰です。

その陰陽が一つとなり、陰は陰を超え、陽は陽を超えて一つの音楽に乗り、曲になりきり、踊りになりきり、場になりきつての結果です。

さてその放送も終わり、普通なら誰もいない一人だけの日曜という事で、また何か面白い番組でもないかとチャンネルを回した事だろうと思いますが、釘付けになったテレビの前でテレビを切ってしまい、冥想というか默想というか、そういう世界に没入し、ふと我に返った時には、またもや一時間余りもの時が経ってしまっておりしました。

そして尚、余韻に酔いしれながら思いました。

二人が本当にひとつの方向に向かい、一つになりきった時に与えるこの感動、感嘆。そしてまた、まるで自分が踊ったかのような感覚の余韻三昧。これはきつといつまでたっても忘れられない感動のひとつになる事だろうと思いました。

何事においてもそうですが、我々の住むこの世界は相対の理の世界です。

その相対の世界の中で両極に位置し、対立する二元が一元となり、その一元が更に一如というか超越というか、そういう状態になって力を合わせきつた時には、それを実際に行なっている当事者は勿論のこと、観ている人をも一如の境地に誘うのではないかという事です。



## 和太鼓の演奏も、相乗の理

ところで私の経営する小さな保育園でも毎年夏祭りが開かれ、年長組みの子ども達による和太鼓の演奏がなされます。

子ども達は一人ひとりが自分の役になりきり、指揮者である保育士の指示に従いきり、全体の調和を取る演奏に向け、日々練習を重ねていきます。

そして夏祭り本番の日には全体が一つになり、力いっぱいの演奏がなされます。

たまには私も「理事長先生、何か一曲歌ってください」と言われ、子ども達と一緒に入場し、和歌山の代表的民謡である串本節などを歌う事もあります。

そんな時は子ども達の演奏に合わせて、また若い保育士がつこり笑って、「どうぞ」と合図をしてくれるのに従い、「ここは串本、向かいは大島」と大きな声で歌うわけです。

そんな時、彼女は無声で私と一緒に口ずさんでくれるのですが、そういう時、私は彼女に対し、普段とはまた異なる感覚を覚えるわけです。

そしてやがて子ども達と彼女と私は一つになり、次には演じる者と観る者の境もなくなり、全体は忽然<sup>こつぜん</sup>一体となり、何か一つの大きな渦の様なものとなっていくのを、体全体で感じるようになっていきます。

そして最後は、大きな拍手と感動の涙の中で、私達の夏祭りは幕を閉じます。



平井謙次先生 直筆の色紙

## 文殊の知恵

一人よりはふたり、ふたりよりは三人、「三人寄れば、文殊の知恵」という言葉もありますが、文殊の知恵という

のは、それは大きな仏様の知恵、力ということでしょう。ふたりで六十四倍なのですから、三人寄ればどれ位の力になるのでしょうか。それは決して数字などで表わせるものではないと思います。

その事になりきることで、人は人を超えた世界を探索できるのだと思います。

迷ったら 迷いきるのが菩薩なり

悟る時は 悟りきったら菩薩なり

なりきるという事が、唯一、時の経つのを忘れ、場を忘れ、生死をも越えた世界に至る道の、その入り口に立つことではないかと私は考えます。

### 〔ご案内〕

3月の勉強会は、3月9日(土)午後7時からを予定しています。皆様のご参加を、お待ち致しております。

今回は、4月13日(土)午後7時からを予定しています。

勉強会、及び月報についてのお問い合わせ先。

編集発行人 もとはこちら会 資料編集部 北原友也

専用HP <http://www.motoha-kochira.com>

mail: [data3@motoha-kochira.com](mailto:data3@motoha-kochira.com)

073・461・6300